

「行動展示」から「共生展示」へ 厳冬期にこそ輝く旭山動物園の動物たち



旭山市旭山動物園●園長 小菅 正夫
(社)日本動物園水族館協会副会長

動物園における展示方法は、以前は「形態展示」が主流であった。この方法では動物は何もやることなく、じっとしているだけである。現在、世界の流れは「生態的展示」に移行しているのだが、これは自然豊かな動物舎づくりなどの環境づくりにより実現されている。こうした環境づくりは、動物にとって「何もやることがない」状態から、「やることがある」状態に状況を変化させることになる。これが旭山動物園で取り組んでいる「行動展示」である。

また、「形態展示」では鉄とコンクリートの素材によりできた動物舎での「平面展示」であったが、自然豊かな動物舎づくりによって3次元での生活となり、「立体展示」にもつながった。

旭山動物園では現在、これをさらに進めて、「共生展示」にも取り組んでいる。これは、ひとつの空間・環境のなかに、主な生活場所や食性を異にする多種の動物が生きていけるように飼育・展示するという考え方(展示方法)である。

具体的には、カピバラとクモザルを共生展示している。マスコミでも取り上げられた、カピバラのエサを狙って水の中に入ったクモ

ザルをカピバラが襲うというハプニングもあったが、「共生展示」の考えを捨てるつもりではなく、むしろ進めていくつもりである。今回のハプニングの問題点は、緊張感のある暮らしがないが故の事故であるということである。緊張感のある暮らしは、ストレスではない。ある程度の緊張感がないと、動物は生き生きとしない。これは人間も同じである。要は、どうしたら動物が幸せに暮らせるか、幸せに見えるかなのである。

次に、動物園を取り巻くいくつかの社会的変化について述べたい。

その第1は、世界的な人口増である。現在地球上には約67億人の人間がおり、人間が生きていくために野生動物の生息域が狭まり、その数が減少している。だが、飢餓に悩む人間に対して、「野生動物のために空腹を我慢しろ」と言うことはできない。

第2としては、リクリエーションの多様化である。テーマパークや外国など、余暇の過ごし方は多様化している。

第3は、メディアの発達である。マスメディアには魅力的な動物の映像があふれているが、それは野生の動物にとっては特別な一瞬である。だが、そんな映像に慣れてしまった人にとって、寝てばかりの動物(園)はつまらなく見えてしまう。

さらに、最近の新しい考え方として「動物福祉」というものがある。動物にも幸せに暮らす権利があるという考え方であり、ある意味では当たり前のことである。だが、これが先鋭化してしまうと、「動物園の中の動物はかわいそう」となり、ついには「動物園などないほうがよい」という主張にまで行き着いてしまう人がいるのは考えものである。なお、動物園での飼育環境は、動物本来の生息地の

